

# 旧約聖書を読む

-はじめに-

船曳建夫（文化人類学者・東京大学名誉教授）

素直に、ただ読もう。「聖書って、こんなことが書いてあったんだ」、が最初の感想だと思う。それでよいのだ。聖書は累計的には人類史上最大のベストセラーである。でも旧約聖書の原本を、「世界の創造」あたりをちょこっと読んでも、そのあと読み続けて、最後まで読み終わった人など皆無に近いはずだ。読んでいて、自分とは関係のない「系図」が長々と出てきたり、卓抜なのか大げさなのかわからない比喻が出てきたりして、そのあたりを読み飛ばしているうちに、まだ千ページ以上あることに気付いて、読み終わることに意味があるの？と自問自答してやめるのがふつうである。このフレデリックとセルジュの「聖書物語」のすばらしさは、その難物の旧約聖書を、簡略はしているものの（それでも五〇〇ページ！）頭から尻尾まで、その山や谷、ツボは外さず、画と文章で描ききって、読者を最後のページまで引っ張っていつてくれることだ。

じつは、私は日本語の聖書を完読したことがある。若い頃、通っていたカトリック教会の日曜のミサの最中、二階の一番後ろで、キリスト教に大いなる疑いを持ちつつ、ミサを無視しながら読んでいた。読んだ自分は誇らしかったが、読まれた聖書には感心しなかった。（何と傲慢な。）その後、文化人類学者となり、そしていま聖書の地から戦争と殺戮のニュースが、毎日のようにやってくるたびに、あらためて読んだこの聖書は、まことに新鮮だった。

人類学者としては、旧約聖書は「ユダヤ昔話」だった。年老いたアブラハムとサラに子供が生まれる話は、お爺さんとお婆さんに桃太郎がどんぶらこことやってくる、日本昔話と同じであった。そして、その後の桃太郎の鬼退治は、聖書ではさらに激しい異民族の殺戮の話として出てくる。この「聖書物語」はそうした血と憎しみの物語も、避けずに正面から描いて、伝えてくれる。読者はそれぞれの読み方で笑ったり、驚いたり、時に怒ったりして読めばよいだろう。聖書の中に、いままで気付かなかった西洋文明の「種」みたいなものを見

つけることは、西洋の絵画、音楽、文学だけでなく、いまの世界の歴史と社会を理解するのにためになる。

でも聖書は宗教書である。キリスト教徒ではない読者は、そこをどう考えればよいのか。そこもどう読もうと自由である。聖書はキリスト教の聖典であるが、その影響は、キリスト教の範囲を大きく超えている。特に明治以来、キリストが愛の人であることは、私たち日本人の心の内側に染みこんでいる。そのキリストがなぜ「新約」として現れるに至ったか、を、この「旧約」聖書は教えてくれる。

キリスト教徒であっても神など信じられない私は、あらためて神の強大さに打ちのめされた。人間の存在は、浜辺の砂の一粒にも似て、ではなく、そんな砂粒より遥かに小さく、大きさなんて無いくらいの存在だ。しかし、そんなふうになり、絶望に閉じこもって打ち震えている人間にこそ、神の声が聞こえる、と。（そうなのか、そうなのか！）この何度も出てくる悩める人間が赦されるモチーフは、あなたがキリスト教徒であろうと無かろうと、毎日流れてくる21世紀的な人類の不幸と悲惨のニュースに、かろうじて立ち向かう方法を教えてくれる。赦されるあなたは赦すあなたになり得る、と。

宗教的ではない日本人は、「聖書にこう書いてあるから」と聖書の字面を自分の行動の正当化に使わないことでは、むしろ聖書のよい読者かも知れない。